序論「濱田徳海コレクション」目録の整理と考察

氣賀澤　保規

一　はじめに

「濱田徳海コレクション」の整理に至る経緯

二〇一七年の初めの頃であったか、東洋文庫研究部の内陸アジア研究班の場に、ファイルに収められた資料が届けられた。長年当研究班をリードされてきた土肥義和氏が、その役割を降りる、ついては機会を得てそれを明らかにしておいてほしい、という伝言であった。

そのファイルの表には「濱田徳海関係資料」の名が記されていた。濱田徳海（はまだ・のりみ、一八九九―一九五八年）、その名前は、敦煌文書の所蔵者で、戦前東洋文庫で開催した第三〇回東京大蔵会（一九四四年）にその所蔵品が展示されたこと[1]、また所蔵品の一部が戦後国立国会図書館に納入されたことなどの情報として、私は知っていた。そのことを詳しく教えてくれたのは主に岩本篤志氏であるが（後述）、別に土肥氏の口からも時々聞いていたからである。土肥氏は文京区本郷の古書店、井上書店がそれを扱ったとも話していた。だがそれ以上に全容を詳しく系統的に知る機会もなく、結局通り一遍の理解に終わっていたのが正直なところである。

土肥氏から託されたその「濱田徳海関係資料」は、濱田氏が集めた敦煌文書（以下「濱田コレクション」とよぶ）に関わる目録の資料といってよく、中身を押さえ直していくと、異なる三種のものからなることが見えてきた。これに加えて、それらを調査し整理する過程で、もう一つ別の、濱田家の遺族から東洋文庫に出され、書庫に保管されていた目録の存在が明らかになった（詳しくは後述）[2]。それら計四点は相互に関連性を有するが、おそらく作成された時期や場所、目的や事情を異にし、一つとして同じものはない。他方、濱田氏の敦煌文書コレクションの名はつとに巷間で取りざたされながら、全容を明らかにした目録類は出ていなかった。最も丁寧に濱田コレクションに迫っていた岩本氏にしても、具体的に検討対象にできたのは、国会図書館に納入されたものおよび後に北京伍倫国際拍売有限公司に購入されたものに限られ、全体には踏み込めなかった。

このように濱田コレクションの全容は明らかにされていなかった。これにたいし、新たに確認できた四点の目録資料は、作成時期が濱田徳海の亡くなった一九五八年に比較的近接し、最も離れたものを含めても約一〇年の範囲に収まると推定された。とすればこれらを通じて、より原形に近い形に近づける、と同時に当コレクションのその後の変容の跡も伺うことが可能となる。おそらく土肥氏も同様な発想に立って長年手元で温めていたのではないか。そうした理解に立って、従来未報告の四点の資料を早めに公表することを決断した。

濱田コレクションはその一部が国立国会図書館に納められたが、後年残りの相当分が中国に買い戻され（その先の売却先不明）、あるいは日本国内

に流出し所在が不明になっているものもあり、残念ながら全部が日本の文化財、歴史の実物資料に収まることはなかった。その結果、濱田徳海という一人の日本人が蒐集した敦煌文書のコレクションが、その解体とともに忘れ去られようとしている。それを座視してよいか。後述するように、当コレクションには東洋文庫が深く関わっていた。その意味からいって、私どもの責務として、濱田本人の事績もあわせて資料の記録を明らかにしておく必要があるのではないか。この企画の背後にはそうした強い思いも流れていることを理解いただきたい。

なお刊行にあたっては、濱田徳海コレクションを先行して研究していた岩本篤志氏にも協力をお願いした。東洋文庫側の新資料に氏が進めてきた研究をかさねることで、濱田コレクションをめぐって新たに何が考えられるか、その意義づけを期待したからである。

二　「濱田徳海コレクション」をめぐる先行の解釈

敦煌文書を扱うとき、私たちはつねに真贋の問題に晒される。濱田コレクションにおいても事情は同じで、国会図書館に収められた四八点の文書について、それらを精査した土肥義和氏は「真本と思われる一三点、疑問を含むもの一四点、保留二一点」と判定したとのことである。[3] 池田温氏はこれを二〇〇六年四月の土肥氏からの私信として紹介した。この数字が示す意味はかなり厳しいものがあるが、ここではその真贋問題は中心の課題としない。

さて、土肥氏と池田氏の見解を念頭に置きつつ、濱田コレクションの国会図書館に収められた文書四八点を詳細に分析したのが、岩本篤志氏であった。氏の見解は次の二本の論文に集約される。[4]

①「国立国会図書館蔵敦煌文献小考」（『立正大学人文科学研究所年報』五二、一九―三五頁、二〇一五年三月）

②「濱田徳海旧蔵敦煌文献再考――国立国会図書館蔵本と北京伍倫国際拍売公司本をめぐって」（『敦煌写本研究年報』一二、二〇一八年三月、一三一―一四六頁）

このうち、①論文においてはじめて四八点が分析され、うち三点が日本古写経で四五点が敦煌文献になること、さらにこの四五点中の二点が濱田コレクションのものとはちがうこと（新城新藏旧蔵の具注暦一点と戦前購入の伝敦煌文献（写経）一点）、したがって濱田コレクション関係文書は四三点の敦煌文書と三点の日本古写経の計四六点になること、などが明らかにされた。ここでは真贋問題は検討の対象にならず、こうしたところから氏は、その倍の「戦後一〇〇点近い規模であった可能性」があり、「少なくともその半数程度は日本の古書市場で入手され」、「濱田以前の日本国内の旧蔵者をある程度まで特定可能」とまとめたのである。

次に②論文であるが、その前に、①から②の間に挟まる一つの衝撃的な出来事に言及しなければならない。すなわち、二〇一六年の八月から九月において、旧濱田徳海コレクションの一部をなす敦煌文書が日本から中国に流れ、オークション会社北京伍倫拍売有限公司によってオークションにかけられ、その後中国国内の各方面へ売却されることになった。点数は合計三六点にのぼり（伍倫本と通称）、それらはオークションにあわせ刊行された方広錫編著『濱田徳海蒐蔵敦煌遺書』（国家図書館出版社、二〇一六年九月）において、カラー版で一点一点紹介され、冒頭に方広錫氏と司馬立心氏による序言・解説そして全点目録がつけられていた。それらがどこから出てきたか。その序言を書いた方広錫氏は、明確に濱田徳海コレクショ

ンのもの言明するが、ただしそれらの出所については一切言及しない。しかしこれだけの点数がまとまって市場に出るとすれは、濱田コレクションを扱った井上書店を措いて他にないことは容易に分かることである。

井上書店が濱田コレクションに関わったことは、店主であった井上周一郎氏が反町茂雄氏（古書肆弘文荘主人）との対談で、直接伝えられている。[3]

反町「それから、あなたは本郷の浜田徳海さんから敦煌の古写経などを沢山お買いになったでしょう。あれは昭和二十八年ぐらいでしたか。」

井上「ええ、あれは実は御主人が亡くなられた後に、遺族のお方から、本を売りたい、生前に集めた古写経や何かを手放したいから、という話だったんです。……先方の強い御希望でバラバラにしないで大きな所に話をして、まとめて納めるようにしてほしいということなので、天理図書館や、武田長兵衛さんの所や、京都の国立博物館長の神田喜一郎先生にも、目録をお見せしてまわったんですが、なかなか売れない。断簡を含め約二〇〇点もある。そのうちに、重要文化財に指定されているものが三点ありました。重美が五、六点あった。」（傍線：引用者）

岩本②論文は、この二つの資料を新たな手がかりに加え、前稿①に微妙に修正を加えつつ、濱田コレクションの形成過程を論じていくが、そのさいコレクションの全点数として、井上氏のいう「断簡を含め約二〇〇点」という数字を意識する。そして一方、井上書店が以前古書カタログに載せた濱田文書にあった一九二という整理番号が、伍倫本に残されていた番号と付け方が一致するという事実に着目して、一九二という数字は濱田コレクションの番号であったと導いた。この二点を拠りどころに、岩本氏の解釈は濱田コレクションが前稿の「一〇〇点近い規模」から、「約二〇〇点」の規模まで倍増することになった。

三　濱田コレクションと東洋文庫

前述した如く、土肥義和氏から濱田コレクションの目録に関する三点の資料が託され、またその後もう一点が見つかり、計四点の目録関係資料が手元に残された。しかしそれらを覗いてみているだけでは、相互の位置関係や関連性がどうなのか、それぞれいつ、いかなる経緯で作成されたものかなどがよくわからない。これらは、東洋文庫研究員としての土肥氏が、長年手元に保管されていたものであることは事実であるが、ご本人に記憶をたどっていただいても、すでに半世紀以上の時間が経っているのでやむをえないが細部の記憶がはっきりしていない。もう一方の事情が分かるはずの池田温氏であるが、すでにリタイアされていてお尋ねできなかった。

そうして困りぬいていたところ、思わぬ形で一つの助け船が出された。私どもの様子を見ていた土肥祐子氏（宋代史、東洋文庫研究員）から、次のメモがいただけたからである。内容は上記の目録の由来や関係に直接ふれたものではないが、濱田コレクションと東洋文庫との関わりや、その時期と様子を伝え、上記の目録が生み出された背景を考える貴重な手がかり、生きた証言となった。メモにはこう記されていた。

1、土肥祐子は昭和三五年（一九六〇）四月～三九年（一九六四）三月まで〔東洋文庫〕敦煌室に勤務。

2、濱田徳海氏のは井上書店から、一時〔東洋文庫で〕預かった。榎一雄、田川孝三、池田温、土肥義和がみている。

3、土肥義和は自由に見てよいというので、非仏教文献を数点写していた。私は写経の記録を写した覚えあり。

4、田川孝三が預かっている時に写真にとってしまおうとした。結果は不明。

5、書庫で帙に入った濱田徳海コレクションのものを見た記憶あり。題箋は森岡康(補注)女史の字（敦煌文献の関係・責任者は森岡氏）。

6、その預った時期、正確でないが昭和三六年～三八年の間で、その期間は一年位であったと思う（出入のどちらかを手伝った記憶あり。）

この他、調査を進める過程で分かったことであるが、東洋文庫文庫長であった岩井大慧氏が濱田家とは早くから接触があったようで、そのコレクションの一部が国会図書館に購入される際に重要な役割をはたしたことが、『国立国会図書館月報』昭和三七年二月号（昭和三七年二月二〇日発行、二四頁）の記事から確認できる。

敦煌写本の収蔵について　当館では最近東洋文庫長岩井大慧の紹介によって故浜田徳海氏の収集した中国経巻―主として敦煌写経―の一部を収蔵することとなった。……その中には、重要文化財五点、重要美術品十二点が含まれ、総点数二百余点の多きにおよんでいる。その一部は大蔵会、墨書展、国立博物館などで展観されたものであるが、このたび譲り受けたものは、……主として敦煌写経二十三点である。

（傍線：引用者）

岩井大慧氏の関与はこのような場だけにとどまらなかった。国会図書館による分割購入が二年ほどで頓挫すると、残りの文書の受け入れ先が決まらない。そこで濱田家は、岩井文庫長に相談する。是の折り出された長男徳昭氏の手紙が東洋文庫に保存されていた。その文面の趣旨は、〝濱田徳海本人は生前、コレクションを崩すことなく一括受け入れで保存されることを切望していた、それには第三〇回東京大蔵会以来、関係のある東洋文庫が最も相応しく、是非ご配慮をお願いしたい〟というものであった（日付は昭和四〇年一月三日）。

この時に東洋文庫がそれらを購入できていたとすれば、今日大変貴重な財産を有したことになるが、もちろんそれはできない相談である。がそれはともかく、濱田家と岩井文庫長および東洋文庫との間に密接な関係があったことが窺われる。それとともに注目されるのは、昭和四〇年（一九六五）の時点では、コレクションの一括購入先を求めて遺族側が主導的に動いている事実である。とすると、そこまでは井上書店の関与の跡は薄かった。そして東洋文庫による購入が不可能となったところで、はじめて遺族側と井上書店との売買契約、その先に生じる濱田コレクションの分割販売の了承という流れになる。それは一九六〇年代の後半からのこととなる。

四　濱田コレクションをめぐる四つの目録資料

以上をふまえ、最後に、土肥氏から整理を託された三点の資料に新たに見つかった浜田家提示のもう一点の資料の、計四点の目録資料を紹介したい。それらに盛り込まれた内容および四目録相互の関係性は、本書の諸目録で確認いただきたい。

Ⅰ　浜田コレクション目録（略称「浜田目録」）（タイプ印刷）

表紙に「国会図書館購入」と朱書・「敦煌文献研究委員会」印あり。内側に「序」文。各項目へは注記あり。

「序」文：「浜田徳海は昭和十三年大蔵書記官として上海駐在中国維新政府財政顧問となり、昭和十九年再度中国に渡り、大使館参事官兼大蔵書記官中華民国国民政府財政顧問となり、二十一年帰朝迄、中国の

史址を踏破して、英仏等の発掘にもかかわらず尚中国全土に四散していた古代重要経典多数を蒐集した。その後国内に於いても重要文化財保護委員会等の援助を受けて、我国に伝来し、国内で四散していた中国経巻と、和経の蒐集を続け、その若年の頃よりの深い宗教心と努力とにより、本コレクションを残したものである。」

これは、一九六一年度（昭和三六年）に国会図書館に納入するに先立って同館に提出した、濱田の全品目録と理解できる。全一八六点（他に日本経三三点）。

II　濱田コレクション目録　中国経之部―主として敦煌出土経（略称「全容目録」）

表紙に「極秘」と朱書。なかは「中国経之部」全品目録と対応文書写真（一）（二）（三）（四）から構成される。

目録の各項目に三段の数字が付く。中段が当リストの通番、下段が写真番号、上段が不明（ただし初年度＝昭和三六年度国図納入の二三点が欠番）。全一八四点（番）。そのうち、通番一―一六九は敦煌文書。一七〇―一八四は非敦煌文書。

なお一七〇番は「重要美術品・版本　寶篋印施羅尼經　杭州雷峰寺古塔藏経」。

この目録の順番・順序はI「浜田目録」と合致せず。また各項目への注記も異なる。Iとは別途に写真を付して作成した目録と推定。

IIはIと同時期ないし、一歩遅れて別途の情報を入れて作成か。その原目録の作成者は断定できないが、濱田徳海本人の可能性も残しておきたい。

III　濱田徳海コレクション敦煌出土経目録（略称「濱田家作成目録」）

昭和四〇年（一九六五年）東洋文庫に、下記の「濱田家手紙」に付して提出された。全一三八点の名が載る。

濱田家手紙：文庫側の受領者は岩井大慧文庫長（当時）、昭和四〇年一月三日受領。これは当コレクションの成り立ちを知る貴重な記事である。

敦煌出土経百三拾八巻を収める浜田コレクションは、浜田徳海（のりみ）が、昭和十三年大蔵省より派遣され、中華民国財政顧問として在勤中、並びに、その後、中国在勤大使館参事官として、再度、彼の地に赴いた際、亡母の供養の為に蒐集に努め、戦時中は山間の寺社に疎開させるなどして保存し、昭和三十三年浜田徳海逝去の後は、長男徳昭（のりてる）（武蔵野音楽大学講師）が中心となり、その維持を図ってきたものであります。

〔参考〕濱田徳昭（はまだのりてる）氏（当時武蔵野音楽大学講師）：幼くしてバイオリンを学び、後に指揮者として日本の音楽界で活躍した指揮者・音楽家。教育面では、広島大学講師、武蔵野音楽大学講師、九州芸術工科大学助教授を経て、明の星女子短期大学教授を歴任。日本演奏連盟評議員も務めた。一九八六年一一月五七歳の若さで逝去した。

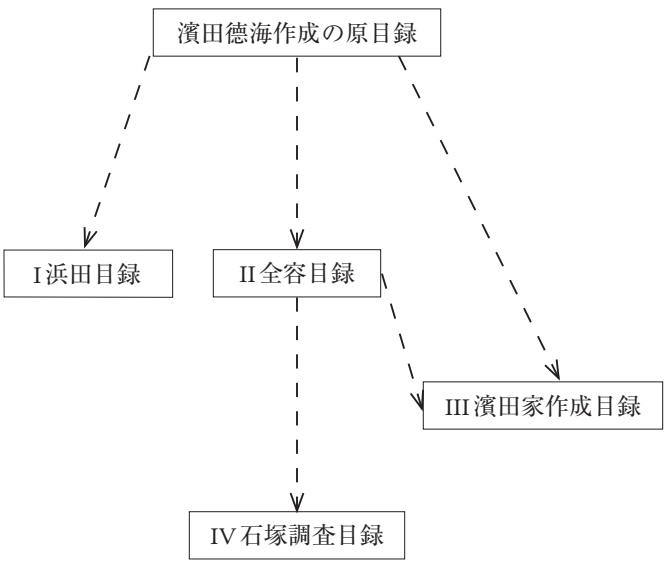
IV　「石塚晴通氏調査記」（正式名称「濱田徳海コレクション調査記録」）

一九六八年三月に石塚晴通氏（当時東京大学大学院生。現北海道大学名誉教授）が作成。各文書名に付される番号は、II「全容目録」の通番に対応する。掲載点数は一二三点で、IIの全一八四点に対し、六一点分が未掲載となる。

本目録は一九六八年の時点で確認可能な実物文書の調査記録で、I、II、IIIの目録とは別系統となる。未記載六一点分は、国会図書館の購入、重要文化財での売却などによりその時点では除かれたものと判断される。

石塚氏の記憶では、調査は国会図書館内で行い、作成資料は担当課長に提出したとのこと、しかし詳細ははっきりしない。これに従うと、濱田コレクションは一九六八（昭和四三）年段階ではなお国会図書館に保管されていたことになる。

以上紹介した四点の目録資料は、濱田コレクションの全容とその位置づけを明らかにする貴重な手がかりとなるはずである。四つの目録作成をめぐる前後関係はまだはっきりしないところが多いが、私はそれらを繋ぐものとして濱田徳海本人が作成した「原目録」があっていいと考えている。濱田はそれができる十分な学殖を備えていた。この問題はさらに考察を進める必要があるが、当面参考までに、下記の関係図を用意してみた。今後さらに機会を得て問題を深めていきたい。



注

（1）『第参拾回東京大蔵会展観目録』（東京大蔵会、昭和一九年一一月一二日）参照。当展観目録には、濱田氏所蔵の二八点の展示資料（うち敦煌文献二六点）と附録の「展示外・敦煌経」として一六点（うち一点は非敦煌経）の名前があげられる。

（2）本資料の所在をめぐってご協力いただいた東洋文庫図書部主任の瀧下彩子氏（同研究員）に感謝申し上げる。

（3）池田温「敦煌写本偽造問題管見」（土肥義和編『敦煌・吐魯番出土漢文文書の新研究』東洋文庫、二〇〇九年）一五四頁。

（4）この二本の考察の間に、「濱田徳海旧蔵敦煌文献小考」（二〇一七年七月二一日、東洋文庫・内陸アジア古文献研究会報告）と「濱田徳海旧蔵敦煌文献小考――その形成過程の考察――」（二〇一七年八月五日、中国中世写本研究二〇一七夏季大会・京都大学）の二回の口頭報告が入る。

（5）反町茂雄編『紙魚の昔語り　昭和篇』（八木書店、一九八七年二月）

の「古医書・本草書の世界　井上書店　井上周一郎」二〇三―二〇六頁）参照。

（補注）森岡康氏は、国立国会図書館支部東洋文庫の職員として、一九四八（昭和二三）年に新規採用され、一九八〇（昭和五五）年に退職したことが分かっている（『東洋文庫八十年史Ⅲ――資料編――』東洋文庫、二〇〇七年、二一頁）。

〔附記〕本報告書は資料の入手後、その整理と入力およびそれら個々の複雑な検討をへて出版に漕ぎつけた。東洋文庫当局には「濱田徳海コレクション」の重要性とその後の状況、および東洋文庫がそこに深く関わった経緯を認識いただき、整理の過程から刊行に至るまで特段のご配慮を賜った。とくに最後の編集の段階では、四つの目録資料ならびに諸目録対照表のデータ確認にあたって、研究部和文編集担当の中村威也氏に大変お手を煩わせてしまった。ここに記して感謝申し上げます。

（二〇二〇・三・三・原稿提出）